障害児教育

1　研究テーマのとらえ方

(1)　養護学級の教育目標

本学級では，「生活力のある児童」を目指している。「生活力のある児童」の姿として次の３つの力を描いている。

・ことばや行動で自己を十分に表現し，主体的に行動する力
・さまざまな集団やいろいろな人とのかかわり合いの中で，生活や学習をする力
・いろいろな場面で判断したり，工夫したり継続したりして生活や学習をする力

この３つの力を総合すると「児童がその子なりの考えをもち，よりよい方向を目指して進んで考え，判断し，表現する（行動する）力」であり，この力をもつ児童が「生活力のある児童」と考える。

(2)　「感性」について

感性とは，「価値あるものに気づく感覚」「物や事象に何を感じ表現するかという」ことであり，さらに問題を追究すると定義されている。(片岡徳雄)この「感じ」「気づくこと」「表現すること」「追求すること」は，決して受動的な活動ではなく能動的な活動である。

本学級の目指す「生活力のある児童」の３つの力は，児童自身が受動的なものでなく，能動的に追究活動を行う姿を描いているといえよう。「気づく」「感じる」「表現する」の「豊かな感性」を育成することにあい通じるものと考える。

児童一人ひとりの「気づく」「感じる」「表現する」授業を創造するためには，教師自身も児童の「気づく」「感じる」「表現する」に「気づき」「感じる」「表現する」感性をもち支援していくことが大切である。

2　２年次までの研究の推移について

(1)　１年次の追究

児童の感性のとらえ方と感性を育む支援のあり方についての追究をした。児童の感性は，その児童のとりまく人間関係，対象となる物，場の設定によ

って変わるものであり，固定的なものではないとした上で児童の感性の様子を次のようにとらえた。

児童の感性の様子

気づく	・学習課題でない事柄に興味関心がある。 ・一瞬対象に気づく。 ・対象に気づくが，それ以外のものに興味・関心がある。
感じる	・対象を感じ，受け入れる。迷いながらも対象の方に近づく。 ・単発的に対象に働きかける。 ・感じたことを自分が好きなような方法で対象に働きかける。
表現する	・イメージして対象に働きかける。 ・友だちや教師の模倣をして表現する。 ・自分なりの表現を工夫する。 ・相互関係の中で，働きかけ合いながら表現する。

教師の支援の方法

支　援
- ・気づきを大切にして創造的な活動をできるように
- ・価値あるものに気づき，よいところの追体験
- ・発想の転換

教師の支援のあり方については，教師自身が扱う素材・題材に感じている，教師自身が多様な表現方法を身につけていることを前提として次のように考えた。

↓←　←　←	・児童の姿に気づく。
↓気づく　↑	
↓　　↑	・児童の実態に気づく。
↓感じる　↑	・児童の姿を意味づける。
↓←　←　↑	・児童の姿に共感したことを表現する。
↓表現する↑	・児童のイメージを広げることばかけ，資料の提示
↓→　→　↑	をする。

(2)　**2年次の研究**

豊かな感性を育むための具体的な支援のあり方について追究をした。各教科・領域の指導内容によって児童の感性の様子と教師の支援の方法を検討し，実際の授業の中での一人ひとりの児童への支援を具体化して授業をすすめた。

授業での指導者の支援の例

目　標　行　動	指　導　者　の　支　援	児　童
粘土を丸めたり伸ばして作った物に好きな食べ物のイメージをもつことができる。	一緒に作りながら「おむすびみたい」「ウインナーみたい」とイメージを膨らませるような声かけをする。	⑭　⑮
作りたい食べ物のイメージをもち，粘土や組み合わせたりして作ることができる。	「先生は，こんなのを作ったよ」と幾つかの粘土を組み合わせて作った食べ物を見せる。	⑬　⑯
作りたい食べ物のイメージをもち，色や形を工夫して作ることができる。	「こんな色の粘土もあるよ。」と声をかけたり，色を組み合わせて作ったものをみせる。	⑰　⑱

3　3年次の研究ついて

(1)　「めあて」について

本学級の児童について学習活動においての「めあて」をもつことは，次のようなことであると考えた。

・今の時間は何をするんだということがわかること
・子どもたちが活動の中に「やってみたい。」ことを見つける，見いだすこと

この「めあて」に迫るためには，子どもが活動をいかに主体的・能動的に行うかということに焦点を当てていく必要がある。子どもたちが主体的に活動することは，「これをするためには，これをしよう。」といった見通しをもっていることと深く関係している。

障害児教育では

活動の見通しをもつことが，児童がめあてをもって主体的・能動的に活動すると考える。

(2)　研究推進について

子どもたちが見通しをもつための支援のあり方を探っていくためにつぎの4点を考えた。

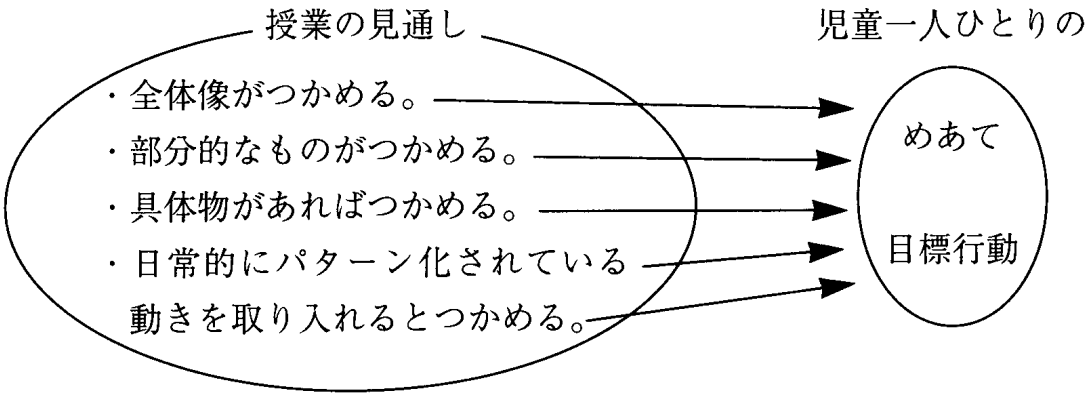
① 授業の中で，子どもたちがどこまで見通しをもっているかということの予想をする。
② 子どもたちが，次の活動の見通しをもち主体的に活動するための具体

的な支援の方法について研究を深めていく。

③ 今年度は，より子どもの視点に立った支援を目指していく。

④ 「見通し」ということについて研究をしている学校の文献研究をして参考にする。

授業の見通しとめあて，目標行動の関係をつぎのように考えた。



学習のステップとめあて追求

学習のステップ	見　通　し	め　あ　て	支援の方法
・学習課題ではない事柄に興味 ・関心がある。 ・一瞬対象に気づく。 ・対象に気づくが，それ以外のものに興味・関心がある。	○具体的な指導者の指示があればわかる。 ○具体物があればわかる。	○○をしよう（個の課題に迫るもの）	児童の姿に気づく。 児童の実態に気づく。
・対象を感じ受け入れる。迷いながらも対象の方に行く。 ・単発的に対象に働きかける。 ・感じたことを自分が好きなような方法で対象に働きかける。	○ことばかけがあればわかる。 ○部分的な活動は理解している。	学習の中で○○の活動を自分たちでしよう。	児童の姿を意味づける。
・イメージして対象に働きかける。 ・友だちや教師の模倣をして表現する。 ・自分なりの表現を工夫する。 ・相互関係の中で，働きかけあいながら表現する。	○自分から活動する。 ○全体の流れがわかっている。（学習の中で主体的に活動できる。）	学習全体の見通しをもって，自分たちでいろいろな活動をしよう。	児童の姿に共感したことを表現する。 児童のイメージを広げることばかけ，資料の提示をする。

この「学習のステップとめあて」を基本とし，各教科・領域において具体的内容を検討していった。